看護基礎教育に必要とされる要素とは
～Edith Cavellがブリュッセルで行った看護基礎教育～
The required factors of nursing education
－Edith Cavell's nursing education in Brussels－

木戸久美子*，高野静香**，赤川ひろ美**，安富雅恵**，吉村喜代子**，安部加代子**
Kumiko KIDO*，Shizuka TATANO**，Hiromi AKAGAWA**，Masae YASUTOMI**
Kiyoko YOSHIMURA**，Kayoko ABE**

要約

本邦における看護基礎教育における課題を解決するために看護基礎教育の原点に立ち戻り、これからの看護基礎教育のあり方を考える。本稿では本邦における看護基礎教育のあり方を模索する資料を得ることを目的とし、看護師が教育課程を修了し資格をもつ職業人としてその社会的地位を確立しはじめた19世紀後半から20世紀初頭にかけて活躍した英国看護師で「もう一人のナイチンゲール」としてその名前を知られているEdith Louisa Cavell（イーディス・キャベル）の考えた看護教育を文献や資料から振り返り、看護師が教育課程を経て職業人となった当時の看護基礎教育はどのようなものであったか、また、看護師にはどのような資質が求められていたのかを考察した。

19世紀後半から20世紀初頭にかけての欧州の看護現場は過酷であり、看護師の健康被害も多く、看護師になるには相応な覚悟も必要であった。よって看護基礎教育課程では、看護師の資質を問うようなカリキュラムが組まれていた。また、医師の看護師への期待も大きく、看護は医療の重要な要であるという意識も大きかった。

キーワード：看護基礎教育，Edith Cavell，資質
Key-words：nursing education ,Edith Cavell, qualification

Ⅰ．緒言

本邦では看護基礎教育の充実について議論されているところであり、平成18年８月に「第5回看護基礎教育の充実に関する検討会」[1)]からこれまでの議論の中間的なとりまとめ案が出された。看護師教育の現状と課題として、学生が卒業時に１人でできるという看護技術が非常に少ないこと、就業後も自分に自信が持てないまま不安の中で業務を行い、医療現場についていけないために離職する者が多いこと、看護基礎教育で修得する看護技術と臨床現場で求められるものとに大きなギャップがあるが、安全が重用しされる中で診療の補助に関する技術の機会が非常に少なくなってきていること、学生の行う臨地実習では一人の患者を受け持つが就業すると複数の患者を同時に受け持ち複数の同時作業を行うことがもとめられるなどの乖離があること、看護師に期待される役割や学ぶべき知識・技術が増えてきており３年間の中でカリキュラム内容を変えるなどの工夫に限界があること、現代の学生の基本的な生活能力や常識、学力が変化し、コミュニケーション能力も不足しているために従来の教育と同じスタートラインから教育を始めることができないことなどがあげられている。また、看護基礎教育に携わる教員側の資質の向上も課題としてあげられ、看護基礎教育と臨床現場の隔たりを少なくするために、看護教員自身も臨床現場に出て現場との接点を多くするとともに、自らの臨床実践能力を高めるべきであると言われている。本邦においてこのような看護基礎教育上の課題が浮上した背景には、看護基礎教育で実施可能な内容が様々な制約を受けて十分にできなくなってしまったことが大きく影響している。特に個人情報の保護に関する法律が2005年に全面施行になったことは、看護基礎教育での臨地実習上におけるあらゆる場面に大きな制約を生じさせる結果となった。また、看護を学ぼうとする者が基本的な生活能力や常識といった面において生活者の視点が十

*山口県立大学看護栄養学部看護学科，**イーディス・キャベル研究会，*Yamaguchi Prefectural University Faculty of Nursing and Human Nutrition，**The Society for Study of Edith Cavell

分ではないなどの資質の変化や看護基礎教育に携わる教員は教育機関に勤務する教育職であり、臨床の現場で勤務する看護師ではないことなども看護基礎教育上の課題の背景にある。このような本邦における看護基礎教育上の課題は今忽然と姿を現したものではない。本邦における看護基礎教育が始まってから少しずつずれが生じ、今現在において大きな歪みとなって現れたのではないかと考えると、早急に本邦における看護基礎教育のあり方の方向修正をはかることが重要である。これからの看護基礎教育のあり方を模索するために、これまでの看護基礎教育を振り返ることも必要だと考えた。つまり、看護基礎教育の原点に立ち戻ることで、これからの看護基礎教育のあり方を考える一助となるのではないかと考えた。

本稿では本邦における看護基礎教育のあり方を模索する資料とするために、看護基礎教育の原点に返り、看護師が教育課程を経て職業人となった頃の看護基礎教育はどのようなものであったか、また、看護師にはどのような資質が求められていたのかを看護師が教育課程を修了し資格をもつ職業人としてその社会的地位を確立しはじめた19世紀後半から20世紀初頭にかけて活躍した英国看護師に焦点をあてて考察することにする。欧州で看護師を専門職業人としての地位を高めた人物としてはFlorence Nightingale（フローレンス・ナイチンゲール）が著名であるが、ベルギー・ブリュッセルで最初の看護師養成のための学校（診療所を兼ねた看護学校）のMatron（メイトロン：師長＝当時の病院師長とは現在の看護部長と同等であり、看護学校の教育責任者でもあった）となり、第一次世界大戦の犠牲者ともなった人物で英国ロンドンのトラファルガー広場に銅像が建てられ、「もう一人のナイチンゲール」[2]としてその名前を知られている英国人看護師Edith Louisa Cavell（イーディス・キャベル）の生涯を振り返り、看護師教育が始まった頃の看護基礎教育の内容について考察する。

Ⅱ．方法

１．期間

平成20年10月11日～18日にかけて英国、ベルギーを訪れ、イーディス・キャベルの看護基礎教育に関する足跡を辿った。

２．方法

イーディス・キャベルが看護基礎教育を受けた英国ロンドンにあるRoyal London Hospital（ロンドン病院）内Royal London Hospital Museumに保存されている資料及び展示物、Royal London Hospital Museum の公文書係Jonathan Evans氏へのインタビュー内容、イーディス・キャベルの出身地に近いノリッジ大聖堂図書館内資料、ベルギーのブリュッセルにある王立軍事博物館図書館内資料からイーディス・キャベルに関連する文献を収集し、19世紀後半から職業としての看護が成り立ち始めた頃の欧州で、その当時の社会の様子と病院看護を取り巻く環境およびイーディス・キャベルが実践した看護基礎教育に関連する記述を抜き出し、看護師教育が始まった頃の看護基礎教育に必要とされた要素は何であったかを考察する。

Ⅲ．結果および考察

現在のベルギー、ブリュッセルにイーディス・キャベルの名前がついた通り（Rue Edith Cavell）が残っている。イーディス・キャベルとアントワーヌ・デパージュ博士の夫人で、イーディス・キャベルとは強い結びつきのあったマリー・デパージュ夫人の名前のついた通り（Rue Marie Depage）が交差する位置に「Clinique Edith Cavell（Edith Cavell病院）」（図１）が建っている。その側には記念碑が残り、

図１　ベルギーのブリュッセルにある「Clinique Edith Cavell」　（撮影　赤川ひろ美）

ベルギー・ブリュッセルの人々にイーディス・キャベルという看護師がベルギーの地において看護基礎教育に携わり数々の業績を残したことを証明している。現在、EDITH CAVELL病院には看護師養成のための学校は併設されていないためにイーディス・

キャベルの考えた看護教育カリキュラムは後年に書かれた文献の中からその一部をみることしかできない。

イーディス・キャベルは1865年12月４日にイングランドNorfolk, Swardestonにて出生した[1)-6)]。ブリュッセルにおいてベルギーで初めての看護基礎教育に携わった看護師としての業績も顕著であるが、その名前が世間に広まったのは第一次世界大戦時にベルギーで英国人兵士達を助け中立国のオランダに逃がしたためにドイツ軍に処刑され、戦争の犠牲者となったからでもある[7)-9)]。

図２　ロンドンのトラファルガー広場に設置されている「Edith Cacellの銅像」
（撮影　赤川ひろ美）

イーディス・キャベルの銅像（図２）はロンドンのトラファルガー広場のSt.Martin-in-the-fieldsという1726年に建立された古い教会の直ぐ側に立っている。イーディス・キャベルの銅像の背後の石碑には４面にそれぞれHumanity（人間性），Fortitude（不屈の精神），Devotion（献身的愛情），Sacrifice（犠牲）の４つの文字が刻まれている。イーディス･キャベルの銅像の台座には以下の文字が刻まれている。
"Edith Cavell, Brussels, Dawn, October 12th, 1915, Patriotism is not enough. I must have no hatred or bitterness for anyone."
（イーディス・キャベル、ブリュッセル、1915年10月12日未明、愛国心だけでは十分ではない。私は誰に対しても憎しみも恨みももつまい。）
これら銅像の石碑や台座に刻まれた文字からもイーディス・キャベルという人物が看護師としての適性をもった人物であり、看護師にとって必要とされる理念を貫いた人物であることがうかがえる。

1907年10月１日、ベルギーのブリュッセルで正規の教育を受けた看護師を養成するための学校が開校した[2)10)-13)]。その開校当時の看護学校は数軒の民家を連ねた診療所と看護学校が一緒になっているというものだった。イーディス・キャベルはその看護師養成のための学校の初代Matron（メイトロン：師長＝当時の病院師長とは現在の看護部長と同等であり、看護学校の教育責任者でもあった）になり看護基礎教育に携わることになった[2)10)-13)]。ベルギーにおける初めての看護師養成のための学校を創設したのは、当時のブリュッセル大学の外科学教授であったDr.Antoine Depage（アントワーヌ・デパージュ博士である[11)13)-15)]。（図３）。アントワーヌ・デパージュ博士が医学の進歩に伴い看護も生まれ変わる必要であるとの考えをもち、正規の資格をもつ職業人としての看護師の養成に着手することになったきっかけは、当時のベルギーにおける看護システムの問題が医療の質を下げていることに気づいたためであった[14)]。当時のベルギーでは修道尼院の尼僧達による傷病者のケアが行われていたが、お勤めや祈りが優先され傷病者のケアに集中できてはいなかったという[14)]。また、高度な特殊技能を修得した尼僧が修道尼院長の一存で転勤させられるなどもあり、医療活動に支障を来した医師達は、看護の仕事は宗教から切り離し、専門的で独立したものする必要があると考えた[14)]。当時のベルギーには宗教色のない病院がなかったために病院付属の看護師養成のための学校はできず、民家を４軒連ね診療所を併設した小さな施設しか作ることができなかったものの、アントワーヌ・デパージュ博士は、看護師養成のための学校の初代メイトロンになる人物の条件として、高いレベルの条件をあげた[13)14)]。ナイチンゲールライン（フローレンス・ナイチンゲールの考え反映した看護教育課程）の教育を受けた看護師であること、ベルギーの共通語であるフランス語が堪能であることという条件であった。イーディス・キャベルは看護師になる前にベルギーで家庭教師をしていた経験

図３　ベルギーのブリュッセルにある「Dr.Antoine Depageの銅板」
（撮影　赤川ひろ美）

があり、フランス語が堪能でベルギーをよく理解していた。また、看護基礎教育を受けたロンドン病院はナイチンゲールラインを取り入れていた機関であった。以上より、イーディス・キャベルはアントワーヌ・デパージュ博士の提示した条件を満たしていた。アントワーヌ・デパージュ博士が看護基礎教育の土台作りのための人材起用に細心の注意を払ったのは、それまでの経験から看護が医療の要であるということを実感していたからであると考える。

１．イーディス・キャベルの受けた看護基礎教育～ロンドン病院の看護～

ロンドンのイーストエンドにあるロンドン病院（図４）は1740年に設立された古い病院で、エレファントマン（Joseph Merrick）の舞台になったことでも有名であり、また、Langdon-Down（Down’s Syndrome）で知られるWilliam Harvey医師が訓練を受けた病院としても有名である[16]。

図４　ロンドンのイーストエンドにある現在のThe Royal London Hospital　（撮影　赤川ひろ美）

ロンドン病院はフローレンス・ナイチンゲールとも関係が深く、その理由は、イーディス・キャベルが看護基礎教育を受けた当時のロンドン病院のメイトロンであったEva Luckes（エヴァ・リュクス）がフローレンス・ナイチンゲールと交流があり[16)-18)]、ロンドン病院は看護教育だけでなく、病院管理運営においてフローレンス・ナイチンゲールから様々なアドバイスを得ていたものと推察される。この当時の看護師の服装と看護学生の着用した実習着がRoyal London Hospital Museumに展示されている（図５）。看護が宗教と不分離であった頃は、尼僧達によって看護が行われていたことから、看護師としての尼僧達のユニフォームが機能重視ではなかったことが容易に推察できるが、Royal London Hospital Museumに展示されている機能重視の看護師や看護学生のユニフォームから看護が職業として確立しはじめたことがイメージできる。

図５　Royal London Hospital Museum内で展示されている19世紀後半から20世紀初頭にかけての看護師および看護学生のユニフォーム（Royal London Hospital Museum の公文書係Jonathan Evans氏から撮影の許可を得た撮影　赤川ひろ美）

イーディス・キャベルがロンドン病院の看護学生として採用されたのは、1896年９月３日で、最初にロンドン病院のTredegar Houseという寮に入り、数週間の基礎課程を受けた。当時の看護基礎教育は病院毎に行われており、看護師免許も共通のものではなく、病院独自のカリキュラムと試験が行われるというものだった[14) 19)]。この数週間の基礎課程というロンドン病院の看護基礎教育の制度はエヴァ・リュクスの発案で始められたもの[14) 19)]で、看護師としての使命感をもち、看護という厳しい仕事と生活を送るための適性をみるといった理由から設定されたもののようである。看護学生はロンドン病院内にある寮に看護学生とともに合宿する専任指導者により解剖学、生物学、細菌学、衛生学の講義を受ける[14) 19)]。このような看護師としての資質を知的能力と適性といった側面から問われるという期間があったために、数週間のうちに看護師に合わないと自ら断念する者や、または指導者から適性がないと判断される者もおり、入学者のうちの何割かの者しか看護師としての正規教育課程に進めなかった[14) 19)]。

２．19世紀後半～20世紀初頭にかけて看護師に

なった人達の背景

当時の欧州は、格差社会でもあり医療を受ける場合にも貧民と富裕層では全く質が異なっていたことが推察される。例えばSt Thomas' Hospital（セントトーマス病院）では200畳程度のワンルームの患者のベッド１つにつき、１つの窓が配置されるという構造のFlorence Ward（ナイチンゲール病棟）が作られ、医療のレベルも高く看護教育も充実していた。一方で救貧施設的な病院も多くあり、そのような病院では医療のレベルも高くはなかったという[20]。それぞれの病院に付属するような形で看護師養成のための学校があったため、病院の置かれた環境や病院の種類によっては入院している患者背景も異なっていたものと思われる。ロンドンのイーストエンドにあるロンドン病院はその立地的な環境から富裕層を対象とした病院ではなかった[16]。患者数も多く、十分に整えられていない病床環境では感染症で多くの患者が命を落としていったという。また､エヴァ・リュクスがメイトロンを務めていた当時のロンドン病院を舞台とした医療と看護現場の状況を詳細に描写したテレビ番組（Casualty 1906）[21]が2006年にイギリスＢＢＣ放送で作成放映されたが、その中で、患者だけなく、若い看護師が命を落としていく様子が描かれ、過酷な看護現場の様子をうかがい知ることができる。看護師の仕事は専門性を問われるだけでなく、肉体的にも厳しいもので、エヴァ・リュクスがロンドン病院において数週間の基礎課程を設けていた理由は、知的な能力もさることながら心身共に強い者しか看護師として務まらないことを確信していたからではなかったかと思われる。

イーディス・キャベルは牧師の長女として生まれ育った。裕福とはいえない環境で育ったが、教育は十分に受けることができ、特にフランス語が得意で、20歳になったときに家庭教師として自立するが、経済的に裕福とはいえない実家の様子からも働くという選択肢以外はなかったものと思われる。幼少期から芸術の素養もあり[22]、また、旺盛な知的欲求心をもち、行動力もあったことから多くの人から慕われていたことが様々な文献を通して明らかにされている[2)-6)]。家庭教師は、当時の中流階級の女性で経済的に自立することが求められていた者が選択する仕事の代表のようなものであった[20]が、看護師という仕事はフローレンス・ナイチンゲールの業績もあり、女性の職業として知られはじめたばかりであり、未だ一般的に選択される職業ではなかったようだ。イーディス・キャベルはフランス語を活かせる家庭教師先としてベルギーのブリュッセルにて10年余り仕事をした後に、父親の看病等がきっかけとなり看護師の道を歩む決心をした[17]。イーディス･キャベルが看護師になろうとした時の年齢は30歳であり、決して早くはなく、看護師の基盤となる教養と社会性を身につけて看護基礎教育課程に入ったことがわかる。イーディス･キャベルが看護師になろうと思った当時は、フローレンス・ナイチンゲールの名声とともにセントトーマス病院が有名であったことが推察できるが、セントトーマス病院ではなく、ロンドン病院での教育を志望した。1896年にイーディス・キャベルが看護学生に採用された当時のロンドン病院の学生は、家庭にいた者、教師、家庭教師、店で働いていた者、女中、見習い看護師などが多かったという記述がある[23]。イーディス・キャベルも家庭教師としての経歴をもっており、当時の看護師を志す者が現代の本邦における看護師を志す多くの若者とは異なり、社会経験や生活経験が豊富な女性達であったことがうかがえる。当時の多くの看護師がおかれた医療現場が過酷なものであったことからも、職業として看護師を選択しようとする者が経済的自立を迫られているというだけでなく、相当な覚悟をする必要があったことも推察できる。

３．イーディス・キャベルが行った看護基礎教育

イーディス・キャベルは２年の看護基礎教育課程をロンドン病院で過ごし、看護師の資格を与えられている[17)-19)]。その後、ロンドン病院の外科病棟での勤務、セント・パンクラス救貧病院、ショアデッチ救貧病院での看護で貧しい人々の置かれた現状を目の当たりにしながら、1906年まで看護師として勤務した[17)-19)]。ショアデッチ救貧病院では看護基礎教育にも携わり[17)-19)]、ロンドン病院から始まった過酷な看護師の労働の中から看護師を志望する者達にとってどのような要素を身につけるべきであるかを考えたのではないかと推察する。

イーディス・キャベルの考えた看護基礎教育課程は３年で最後に試験があり、試験に合格すると看護師の資格が与えられるというものだった[10)-13)]。その後２年間は就職して働かなければならなかった。このベルギーにおける看護師養成のための学校の目的は、女性のための専門職をつくること、科学を推

進すること、病苦に病む人たちに最善の援助をすることであった[10)-13)]。現代にも通じる教育理念を掲げた看護師養成施設であったことがうかがえる。看護学生の資格としては20歳から35歳までの女性でフランス語が話せることとし、国籍は問われなかった[10)-13)]。また、勉学だけでなく、掃除や遅刻を許さないなどの厳格なもので、「看護師たちが学ばなければならないもののなかに、教授でも得られないものがある。それはベッドサイドの実習でも十分に得られない。看護師の人格の陶冶と責任感の養成というこの重要な教育をわれわれの師長は夜、学生を自室に招いて語り合うことで実践している。看護師の養成にあたって我々が望むのは、その量でなく質である」との設置委員会の報告書[10)-13)]から、看護師は知識や技術だけでは十分ではなく人間性にその適性があるということが社会的にも認知されはじめだしたことわかる。

イーディス・キャベルがベルギーのブリュッセルにおける看護学校で用意したシラバス[25)]を以下に示す。

1．看護の歴史
　英国での復興
2．看護師の生活
　その性格、勉学、責任
3．看護婦の役割
　看護学生として、看護師として、貧しい地域の住民に対する訪問看護師として、衛生教育（指導）者として、看護教育者として、病院や診療所における監督者として
4．モラルの質について
　献身、誠実、身嗜み、倹約
5．責務

表１　イーディス・キャベル＝マリー・デパージュ研究所看護学校のカリキュラム

科目	時間数				
	１年	２年	３年（３コース）		
			病院	小児科	産科
Ⅰ．一般科目及び技術					
哲学	36	36			
教育心理学	36	18	36	36	18
法学	18	18		18	18
医学概論	36		18	18	18
解剖生理学	72				
微生物学	18				
衛生・予防・育児学	108	18		36	72
生化学　理論	36				
実験	18				
栄養学	36	18		36	
一般看護学　理論	36				
看護技術	72				
病理学と看護（内科、外科、小児科、産科、精神科）					
理論		180	198	180	144
看護技術		180	108	36	108
看護技術演習			36	36	18
保健経済学			36	36	36
ゼミナール	18	36	36	36	36
Ⅱ．専門演習					
栄養学	54	18		18	18
看護演習	72	90	72	54	54
臨床演習	270	216	252	396	396
Ⅲ．実習（見習期間）	360	468	504	360	360
追加実習	150	150	130	130	130
合計	1446	1446	1426	1426	1426

イーディス・キャベル＝マリー・デパージュ研究所看護学校は現存していないので、本カリキュラムは昭和54年当時のものである。

病人及びその家族や友人に対して、医師に対して、自分自身に対して、母校に対して

6．目的
生命を守ること、けが人を手当すること、苦痛を和らげること、診療の補助をすること

7．医師と病人に対する行動指針
細部に至るまで丁寧にそして正確に、様々な疾病の可能性を踏まえて、観察

8．現在の症状の説明

9．臨床看護
a）与薬、清潔、浣腸、注射、ゾンデ挿入検査、吸角処方、蛭吸血
b）衣服の着脱、環境整備、ベッドメイキング、換気、感染症と消毒

10. 死
ターミナル期にある患者ケア

11. 勉学のまとめ
看護師という仕事をどのように理解させるか

このシラバスの中でも目を引くのは、現代の看護基礎教育であまり重視されていないように感じる「モラルの質について」である。内容をみると、献身、誠実、身嗜み、倹約とあり、看護師として求められる姿を見ることができる。

イーディス・キャベルが1910年に１期生を送り出したときの学生数は２名であり、約８割の学生が適性に合わずに辞めてしまった[10)-13)]。1910年には近代的な総合病院サン・ジル病院が建てられ、イーディス・キャベルはメイトロンに任命され、診療所で実習していた学生も総合病院での実習が可能になり、同年、ベルギー政府は看護師の登録制を開始し看護学生数も増えていった[10)-13)]。

1912年にICN大会でアントワーヌ・デパージュ博士は看護師養成のための学校が開設され５年が経過し、ベルギーにおいてさらに正規の看護師の配置された病院が増加しつつあることを報告している[10)-13)]。この報告は、看護基礎教育を整備することが医療界の発展につながることを証明しているともいえる。昭和54年に高見が訪ねた当時の「イーディス・キャベル＝マリー・デパージュ研究所看護学校」のカリキュラム（表１）[26)]は３年制で180年近く経過したその当時においてもイーディス・キャベルの理念が継承されたものであったという。

Ⅳ．結語

看護師を志望する者には看護師としての適性があってほしい。エヴァ・リュクスの“看護師となるべきものを選別するための数週間”ともいうべき基礎課程は現代の看護基礎教育課程にはないが、入学後すぐの退学や早期離職などの問題解決の糸口がここにあるのではないかと思われる。

19世紀後半から20世紀初頭にかけての欧州の看護現場は過酷であり、看護師の健康被害も多く、看護師になるには相応な覚悟が必要であった。現代の本邦における看護者の置かれた状況と形は異なっているもののその本質が大きく異なっているともいえない。当時の看護基礎教育課程では、看護師の資質を問うようなカリキュラムが組まれていた。これからの看護基礎教育にはイーディス・キャベルが考えたシラバスの中にある「モラルの質について」を重視する必要を感じた。また、看護職だけでなく、医療に携わる者達が、看護基礎教育を整備することが医療の発展に欠かせないということを再認識する必要があると思う。

謝辞

本稿は、イーディス・キャベル研究会および元山口県立大学教授　下笠徳次先生が翻訳された「EDITH CAVELL」（Rowland Ryder著）から多くの参考資料を得ました。この場を借りて深くお礼を申し上げます。

文献

１）第５回「看護基礎教育の充実に関する検討会」資料１これまでの議論の中間的なとりまとめ案（骨子）http://www.mhlw.go.jp/shingi/2006/08/s0804-6a.html（厚生労働省）

２）Terri Arthur：The Life and Death of Edith Cavell, English Emergency Nurse Known as“The Other Nightingale”Journal of Emergency Nursing,32（1）,30-35,2006

３）高見安規子：歴史の中の看護婦－イーディス・キャベルとシスター・ドーラの生涯、東京、医学書院、1982、6-14

４）JONATHAN EVANS:EDITH CAVELL,Royal London Hospital Museum,London,2008,1-5

５）Sheila Upjohn:EDITH CAVELL-THE STORY OF A NORFORLK NURSE-,Norwich Cathedral

Publications Ltd,Norwich,2000,1-4
６）Rowland Ryder:EDITH CAVELL,Hamish Hamilton Ltd,London,1975,3-19
７）高見安規子：歴史の中の看護婦－イーディス・キャベルとシスター・ドーラの生涯、東京、医学書院、1982、p70-92
８）JONATHAN EVANS:EDITH CAVELL,Royal London Hospital Museum,London,2008,41-48
９）Sheila Upjohn:EDITH CAVELL-THE STORY OF A NORFORLK NURSE-,Norwich Cathedral Publications Ltd,Norwich,2000,16-31
10）高見安規子：歴史の中の看護婦－イーディス・キャベルとシスター・ドーラの生涯、東京、医学書院、1982、39-50
11）JONATHAN EVANS:EDITH CAVELL,Royal London Hospital Museum,London,2008,21-34
12）Rowland Ryder:EDITH CAVELL,Hamish Hamilton Ltd,London,1975,62-78
13）Clark Kennedy:Edith Cavell-pioneer and patriot-, Faber and Faber, London,1965,58-95
14）高見安規子：歴史の中の看護婦－イーディス・キャベルとシスター・ドーラの生涯、東京、医学書院、1982、35-37
15）Sheila Upjohn:EDITH CAVELL-THE STORY OF A NORFORLK NURSE-,Norwich Cathedral Publications Ltd,Norwich,2000,11-15
16）The Royal London hospital museum,http://www.medicalmuseums.org/museums/rlh.htm
17）高見安規子：歴史の中の看護婦－イーディス・キャベルとシスター・ドーラの生涯、東京、医学書院、1982、21-32
18）Rowland Ryder:EDITH CAVELL,Hamish Hamilton Ltd,London, 1975,36-54
19）JONATHAN EVANS:EDITH CAVELL,Royal London Hospital Museum,London,2008,7-16
20）高見安規子：歴史の中の看護婦－イーディス・キャベルとシスター・ドーラの生涯、東京、医学書院、1982、14-20
21）Casualty1906,http://www.imdb.com/title/tt0862661/
22）Claire Daunton:Edith Cavell-HER LIFE AND HER ART-,The Royal London Hospital,London,1990,14-21
23）高見安規子：歴史の中の看護婦－イーディス・キャベルとシスター・ドーラの生涯、東京、医学書院、1982、25
24）高見安規子：歴史の中の看護婦－イーディス・キャベルとシスター・ドーラの生涯、東京、医学書院、1982、p21
25）Rowland Ryder:EDITH CAVELL,Hamish Hamilton Ltd,London,1975,71
26）高見安規子：歴史の中の看護婦－イーディス・キャベルとシスター・ドーラの生涯、東京、医学書院、1982、220